

# エドワード・サイド OUT OF PLACE

2007(平成19)年2月5日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★



監督＝佐藤真／出演＝マリyam・サイド／ナジュラ・サイド／ワディー・サイド／リマ・タラジ／マイケル・ウッド／ギル・アニジャール／ラシード・ハリディー／ノーム・チョムスキー／シャフィーク・アル＝フト／ナビール・シュライデ／ゾハル・バルカイ／アリーザ・カシン／ナビール・ハッダード／アズミ・ビシャラ／イラン・パペ／ミシェル・ワルシャウスキー／ダニエル・バレンボイム／ゴーリ・ビスワナサン (シグロ配給／2005年日本映画／137分)

## 第3章

観終わったら議論したくなる

……この映画は2003年9月に死亡した、パレスチナ人であり世界的な知識人であるエドワード・サイドの足跡をたどったドキュメンタリー映画。そして、島国ニッポン人に苦手なパレスチナ問題を、彼の著書を指針として、広い視点で追っていた人物がドキュメンタリー映画監督の佐藤真。第61回毎日映画コンクールでは、『蟻の兵隊』などの名作を押しつけてドキュメンタリー映画賞を受賞したが、観ていてしんどいというのが正直な気持ち。したがって、勉強だと思って果敢にチャレンジしなければ……。

### 第61回毎日映画コンクールでドキュメンタリー映画賞を受賞！

2007年2月6日付毎日新聞紙上において、第61回毎日映画コンクール受賞作が掲載されたが、本作が、25作の応募・推薦の中、見事にドキュメンタリー映画賞を受賞していた。ちなみに、1次選考で残ったのはこの他、『プージェー』(06年)、『六ヶ所村ラブソディー』(06年)、『蟻の兵隊』(05年)、『ツヒノスミカ』(06年)、『三池 終わらない炭鉱の物語』(05年)の5作。

他方、『キネマ旬報』2007年2月下旬決算特別号は、第80回キネマ旬報ベストテンの文化映画ベストテンを発表したが、『蟻の兵隊』が2位、『プージェー』が3位、『六ヶ所村ラブソディー』が4位、『三池』が8位に入っているものの、本作はベストテンにすら入っていない。さて、それはなぜ……？

## エドワード・サイドって、一体誰……？

いくら第61回毎日映画コンクールでドキュメンタリー映画賞を受賞した映画であっても、パレスチナ問題によほど興味を持って研究している人を除いて、ほとんどの人がエドワード・サイドって一体誰、と思うはず。資料によると、彼は1935年イギリスの委任統治下のエルサレムに生まれ、15歳で渡米し、学位を取得した後、比較文学の世界や文学批評家として世界的に知られるようになり、またパレスチナ問題の代表的な論客として注目を集めた人物とのこと。そして、パレスチナ人である彼は2003年9月に死亡したが、そのお墓は後半生を過ごしたニューヨークでもなく、生誕の地であるエルサレムでもなく、妻マリアムの故郷であるレバノンのブルンマーナに、2004年の春つくられたとのこと。ヘエ……。

## なぜ日本人監督が……？

ユダヤ問題やパレスチナ問題は、日本人が最も理解しにくい分野の1つ。したがって、そんなパレスチナ問題を、またサイドという人物のドキュメンタリー映画を、なぜ日本人の佐藤真が監督したのか、と疑問に思うのは当然……？

そこで資料を調べてみると、この佐藤真監督は、東京大学在学中に熊本水俣病患者の支援活動に関わり、卒業後もずっとドキュメンタリー映画の製作に関わってきた人物で、『阿賀に生きる』（92年）は私も聞いたことのある作品。今日の試写会には、本来この佐藤真監督があいさつに来る予定だったが、体調を崩して自宅療養を命じられたため、やむなく欠席されたとのことで、それに代わる2月5日付の文書によるごあいさつとお礼があった。

それを読み、また佐藤真監督の主な作品・著作を調べてみると、彼がいかに大きな視点でパレスチナ問題を捉え、またそれを理解するためにサイドの『OUT OF PLACE』を指針としたかがよくわかる。

そんな彼にとって、2003年9月にサイドが死亡したことは大きなショックだっただろうが、逆にそれが、この映画づくりの大きなバネになったこともまちがいないはず。島国ニッポンの中にも、こんな広い視野を持ったドキュメンタリー映画監督がいたことに、あらためてビックリ……。

## 「OUT OF PLACE」とは……？

資料によると、サイドは、1970年代からパレスチナ問題についての著書を精力的に出版し続けている。そして、『Out of Place:A Memoir』（『遠い場所の記憶』、2001年）は、永遠に失われたパレスチナでのサイド一家の痕跡を描いた自伝とのこと。と言われても、多分ほとんどの日本人はサッパリわからないはず……？ 実はこの映画を観た私も、サイドが訴えているパレスチナ問題について、まだほとんどわからない状態。もちろん、資料にもいろいろと書かれているが、そもそもスクリーン上に登場してくる多くの実在の人物についても、後述のダニエル・バレンボイムを除いてすべて私の知らない人ばかり。さあ、佐藤真監督が『OUT OF PLACE』を指針として描く、パレスチナ問題とは一体ナニ……？

## 羽仁進氏の講評によって代用を……

そこできわめて安易な手法で恐縮だが、この難しい映画の理解のために、前述の2月6日付毎日新聞に載せられている羽仁進氏の講評をそのまま引用しておこう。それは次のとおりだ。①この作品は、エドワード・サイドの思考に触発されながら、作者自身の思想を育てあげ表現したことで、まれに見る映画となった。②中東のきびしい現実を見つめながら、その混沌の傍らに、微かな希望の光を感じるという構成には、作者自身の願いがうかがわれる。③まことに長い映画で、途中では見ている私の心が、とほうもない迷路に落ち込んだのかと慌てたが、最後になって振り返ると、その1つ1つの迷いの点が、全体の構成の中で実に適確であったことに気付く。これはその背後に思想が形成されていく道すじが示されていたことでもあり、誠に希有な体験となった。④境界線上に生きる人々を、これほどに深く、また温かくみつめた作者の視線には、必ずしもその思考に同意していない私としても、大きな拍手を送りたい……さあ、これでこの映画のポイントを理解し観てみようという気になってもらえただろうか……？

## ダニエル・バレンボイムの登場にビックリ！

私は大学時代からかなりのオーディオマニアで、お金がなかったから数少ない

手持ちLPレコードをすり切れるまで聴いていたもの。ところが1974年に弁護士登録をすると、LPレコードを自由に買うぐらいのお金は入ってくるから、よくまとめて何十枚も買っていたもの。もっとも、そうなると今度は暇がないから、一度も針を落としたことのないLPレコードが何十枚も……。

それはともかく、1942年生まれのダニエル・バレンボイムは、私が弁護士登録をしてLPレコードを買いまくっていた1970年代後半に急に有名になったピアニスト兼指揮者……？ ヒトラーがリヒャルト・ワーグナーを崇拜したことはよく知られているし、ベートーヴェンが生まれた国ドイツでは、フルトヴェングラーからカラヤンへの系譜が主流だが、音楽の世界でも他の芸術の世界と同様、ユダヤ人の才能がいっぱいで、バレンボイムもアルゼンチンのブエノスアイレスで生まれたユダヤ人。ちなみに、バイオリンのヤッシャ・ハイフェッツや指揮者のロリン・マゼールもユダヤ系だし、ゲオルク・ショルティもユダヤ人。

そんなバレンボイムが、このサイドときわめて深い交遊関係にあったことを、私はこの映画を観てはじめて知って、ビックリ……。さらに、ネット情報を調べたところによると、2001年にバレンボイムが、イスラエルでワーグナー作品を指揮したことによって、国民的反発を買ったらしい。ところがその後、アラブ人とユダヤ人の混成オーケストラが結成された際、指揮者選びをめぐる楽団員が紛糾したところ、アラブ側を納得させるために担ぎ出されたのがバレンボイムだったとのこと。これはバレンボイムが、たびたびイギリスやアメリカにおいてパレスチナ寄りの発言をしてきた過去や、歯に衣を着せないイスラエル政治批判、サイドとの交遊関係、イスラエル本土での演奏よりもイスラエル占領地区での積極的な慰問演奏が、アラブ側に評価されたためとのこと。

こんな人種問題や民族対立は島国ニッポン人にはなかなか理解できないテーマだが、アラブ、イスラエル、パレスチナの混合世界では当たり前のこと。この映画は、そんなバレンボイムによる静かなピアノ演奏でラストを迎えるが、指揮者であるバレンボイムが、オーケストラにおいてはいかにバランスが大切かという例を持ち出して、サイドの功績を誉め称えた見事なスピーチには、脱帽……。

2007(平成19)年2月7日記